

金州城下の作（乃木希典）

山川草木轉荒涼 十里風腥新戰場
征馬不前人不語 金州城外立斜陽

山川 草木 轉た 荒涼

十里 風 腥し 新戰場

征馬 前まず 人 語らず

金州 城外 斜陽に 立つ

解説 この詩は日露戦争の戦場である南山の戦跡を弔ら
い、山上の戦死者の英霊を慰さめたときのもの。

語釈 ※金州城||満州の南端、旅順港の背後の要地。

※転||いよいよ。ますます、※荒涼||荒れはててすさまじ
いさま。※征鳥||車馬。のちには戦争に用いる馬の意にも
使われるようになった。※不前||「前」は「進」と同意。
※立斜陽||夕日を受けながら馬をとどめる。

通釈 山川草木、(すべて蟬丸のあともなまなましく、)
あたり一面、見れば見るほど荒れはててすさまじいありさ
まである、十里四方の間をに血なまぐさい風が吹いて、こ
の戦争直後の戦場は、実にいたましいかぎりである、わ
が乗る馬車も進もうとはせず、だれもかれもみんなだまっ
て口もきかない。自分け今、夕日に照らされて、金州の町
はずれで無限の感慨に堪えながら馬をとどめているのであ
る。